

淳世風

四方陽

初下

特別  
13  
3474  
4







けれど其のさやうな物ありては其の者ハ万一飽つては

とげさるるが後へ申へる石垣へもまを付て死んで

まうさか融其のさやうな者ハ死でも死ハ位終へ

あてあつたと思へて一斗の酒を少くも

ちんともござりませぬ。其にちえ終るまうさやうな者でふらさ

ませぬ。あれがあは陰で死がらぬ。さうさうまふまうさやうな

かきさうり日向ふりして。とらさうまのあははくろくして

までさう常不形ちりまふ。とらさうまのあははくろくして

得のあつてござりませぬ。其にちえ終るまうさやうな者でふら

ませぬ。あれがあは陰で死がらぬ。さうさうまふまうさやうな

かきさうり日向ふりして。とらさうまのあははくろくして

までさう常不形ちりまふ。とらさうまのあははくろくして

得のあつてござりませぬ。其にちえ終るまうさやうな者でふら

ませぬ。あれがあは陰で死がらぬ。さうさうまふまうさやうな

かきさうり日向ふりして。とらさうまのあははくろくして

までさう常不形ちりまふ。とらさうまのあははくろくして

得のあつてござりませぬ。其にちえ終るまうさやうな者でふら

ませぬ。あれがあは陰で死がらぬ。さうさうまふまうさやうな

かきさうり日向ふりして。とらさうまのあははくろくして

までさう常不形ちりまふ。とらさうまのあははくろくして

あてふも後へ一今ゆらアナク今ゆらアナク後へもふゆらアナク

大吉お代も天井にせられなく中へ石垣へあるまら

付て死んででも志まふ能井のふやうな昔へ死でも親の

ト早死して一をまげお泣き

全体友がうらなうさアハさやうでござんやとおやん

廿日大吉お代も親の相を背く物とやアまの親

おまると老て又我がふふ不考をさるるアゆらなく

湯の中であらる声がとせ

此の坊がまらうと大と仙臺浄瑠璃だらう

お代もゆらゆら程おやふ又九郎判官義経どの島をさう

下りてお早其日の出立お上り赤地の錦の直衣を引張

下りてお紺の布子のどてら張り張り附屬ふ供と亀井

片岡伊勢駿河西塔の武藏坊彼等まんどうは供おて尻

泥水の流れるやうに下らう其妻も下らう又明後日

下らうおやうおやうお下らうお早内大将も長旅路の更

されば草臥果ごよ下弁慶何曾をかけべが解くも無

うごきあきやうやせび弁慶ハ大将の支と物隨々謎を解  
 まさといそんあら謎をかけぶらそもく真来此とかけて何と  
 解とあきやうやせび弁慶ハやうむらうハ山首かぶけ居らけ  
 了引やう思按が附らけと支ハ何やう心易そもく真来此と  
 かけてハ依藤太秀吉と解まさる其心ハあんだんべむをかる  
 つねと解うらうらハ大将我折果とよヨリ又弁慶ハ日本一の謎  
 解の名人ごころとびらえんでハ島の浦へ着ふらう扱いごさ早  
 であらちち起つア室不西塔の武藏坊弁慶柄も四尺刃も足  
 あはせてハ尺の長刀をうらまらうとらう傍あつらの鼻があぶ後  
 であきといそやア長カア何處うけん出と巾着うけん  
 出といそやア爰来う音斬ぶかきやうやせび平家の軍勢  
 らうやんもありされども怪我ハあうらうらうリゴリヤたあらぬと軍  
 逃まるるを真額梨割車斬あつら切らうやんもあり腕を切  
 らうやんもありされども怪我ハあうらうらうリゴリヤたあらぬと軍  
 勢どもそころあつらの鉄を拾つて縫くおふ腮のかけを  
 かくと縫くかとのかけをハ腮へ縫くあつらかり切らきも

1  
 2

ありか〜と人<sup>ひか</sup>賢<sup>えん</sup>の生るもあり。あつわけまりりて弁<sup>べん</sup>慶<sup>けい</sup>又<sup>ま</sup>三<sup>さん</sup>尺<sup>じふ</sup>あま<sup>り</sup>

のわがどのときをあまのどののどくえんづらぬいたげ。是<sup>これ</sup>あり

何<sup>なに</sup>ぞよかんべい。ハテ臍<sup>し</sup>豆腐<sup>とうふ</sup>の黒<sup>くろ</sup>焼<sup>やき</sup>がよんべいとぞくろろる。中<sup>ちゆう</sup>畧<sup>りやく</sup>

御<sup>ご</sup>代<sup>だい</sup>もかさね。方<sup>かた</sup>で歳<sup>さい</sup>貴<sup>き</sup>賤<sup>せん</sup>上<sup>じやう</sup>下<sup>げ</sup>あ。あづて感<sup>かん</sup>せぬ者<sup>もの</sup>こそ

まうりなご。風<sup>ふう</sup>呂<sup>りよ</sup>の中<sup>ちゆう</sup>あて。ヤンヤ〜。あての坊<sup>ぼく</sup>かごあつたのふををまあん

るあり。くんのころの盲人<sup>めんなん</sup>のあまのあひのどく。あまもあまをされちげあて

出<sup>で</sup>るあり。人の盲人<sup>めんなん</sup>のあけあ湯<sup>たう</sup>をくんでまじ板<sup>いた</sup>の上<sup>うへ</sup>をあふであ。あづくゆくと

あづく〜出てる盲人<sup>めんなん</sup>と。アイタ〜。盲人<sup>めんなん</sup>のあて。あまのあまををるる。明<sup>あき</sup>

盲<sup>めう</sup>の二<sup>に</sup>やと。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま

ね〜ある。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま

あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま

あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま

あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま

あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま

あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま

あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま

あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま。あまのあま

あつぐらゝ痛ませぬういへ何ともござりませぬ貴公のあつこは

イヤどんど痛もござるね併存既同士銜合をうて。ちつ終

一ツてうとらふ古の吐があらうてナカ  
ヨマ 柚の熱湯をこれ

苦でぶあう今そと入波で  
とてあつこいテめんようま

たうと今波ぶぶのうなるあどら  
又一をいふて来て。そをくあつこ  
さいせんのあつこいせんのあつこ

とらとあつこいせんのあつこいせんのあつこ  
まご波んう今そと入波ぶぶの

とてあつこいせんのあつこいせんのあつこ  
のいせんのあつこいせんのあつこ

何れをいふまご波んう今そと入波ぶぶの

テめんようま  
又二つうんでらるまご波ん  
アヤまで湯をかき奴をけ

まご波んう今そと入波ぶぶの  
あつこいせんのあつこいせんのあつこ

湯をかきぬ今そと入波ぶぶの  
柚の熱湯をこれ

あれが今波んで来て  
ハテめんようま

今波んで来て  
今波んで来て

今波んで来て  
今波んで来て

今波んで来て  
今波んで来て

今波んで来て  
今波んで来て

今波んで来て  
今波んで来て



一目れ辨天五目之羅漢ハ  
 赤くくつてだま目入道  
 目ぶ録り目でも化物と  
 されねを八目うまきの  
 漸焼にならぬとくを  
 目がかつて  
 やらたむに  
 目がかつて  
 かしがたむに  
 大はねおろしと  
 めくくつての  
 百八の鏡類  
 書のをまの  
 多むの  
 目ける更  
 みるより  
 みるの

さつての城の  
 用おれは  
 自ハしきまの  
 虫かき  
 あままりん  
 一ま検校  
 目み  
 ころころ  
 さつての  
 塔を  
 茶黄ハ  
 かくと  
 あま  
 成用心

利のく  
 千のたの  
 おま  
 本ゆ  
 あま

下平  
 海



ちがごころまきとナトのれがえとる「アハハハ」コトささめあ  
まめ目かほづねと「疔の蟲でごころまきと「ムらもど。夏ハ虫干をす  
く土用の虫がるハ、寒の虫ハ「維も干さぬてナがりり「イハ「寒のの  
虫ハ「維も干さぬて「それハ「何のるぞごころまきと「寒の虫ハ「イハ「  
五疔として、いろくの疔の病でごころ「ア病ハいろくの借の病として  
高ハ五貫をくらく「一両も足らぬるぞ「夫が「あんの目有金を  
「ア「何も合ふ「ア「何も笑ふるハ「イハ「そも「何のハ「  
「あの借の病ハ「イ私ハ瘡毒でごころまきと「瘡毒ハ「何と  
「ア「何も笑ふるハ「ア瘡毒ハ「いろくの芋掘と「いふハ「  
「ア「そんな物でごころまきと「夫が「能療治があるハ「ア「何を  
まきと「ア「療治があるハ「医者があるハ「ア「毎日箱を擔つて  
呼であつり「ア「何で「ア「われを「あるハ「まど「存ませぬ  
「ア「下疔瘡毒治「ア「ちり「貴さ「あら「三百六十日「目を  
「あるハ「く「後づ「いハ「あるハ「まい「ア「目を「塞で居ても「心ハ  
寐ませぬハ「ア「寐時ハ「穴寐まき「の懷胎の女の腹が大きい  
とて、食を食ひ「いハ「居らぬ道理で「ア「あるハ「是ハこれ

等おとどりのそらりの人の大おほ赤あかく湯ゆ出でつて無な統となぐら

蝟こふさると直なすのある頸くびどりのこちりのおたれたれ白しろたれ

不くろ黒くろ産う既ま寒さむの虫むしで盲くらす人の氷こ産う既まとれまぶた産う既ま

さこそえとが赤あか産う既まとれ珍めづらしりの不ふ私しの豆まめふ交まじり

ござるまさとあくく貴き公こうも瘡かさ毒どくうう不ふ私し麻あ疹しんが目めへおり

ましてあ麻あ疹しんが目めへおりのおりの時とき不ふ私し

とぞあいままま何なにとももやませぬな今いまぞんぞんざざいいままああごご大たい切き

の目めへおりのままぐら案内案内するふ無む作法さくるるままごごも麻あ疹しん

でい合あせせ海う鹿かが自みづかへへおりのくく咳せき瘡かさののらら目めへおりのくく眼がん病びやう

であららまま不ふ私し叔しやくささののぐぐまま目めへ人ひと回まわの眼がんととままるる目め

えりりて眼がん病びやうふふららてて不ふ私し盲くらふふするるををむむごご

お又入の男おまたしの男小桶こづくみみををととててささががああららががひひちちううここいいおおいいににはは不ふ私しああららのの男男ををむむごごをを立たてておおててをを松しょうををううけけここままごごああららくく不ふ私しここちちりりのの男男十じせせここららんんででおおををああびびせせここ不ふ私し免めんままののどどううもも不ふ私し相さうごごままりりここがが後ごくく不ふ私し鹿か相さうででままむむらら湯ゆををここららせせここ上うででああららううけけららとと不ふ私し野や郎らうの

索麩と思ふうソウコ「イヤ笑ふわらあううくくああぞぞ人ひとかかああををかかけ  
て是こゝがわんの水みづけけ倫れんどど二に人にんななぐぐおおれれがが對あひて面めんどどここししけけ通とほ  
み瓶びんがが鼠ねずみへへ落おちささすす十じふ分ぶん濡ぬどどアアキキウウククンンチチウウねね二に人にんななががうう  
待まちて居ゐろろ。ここしし番ばん以い先せん刻こく々々喧けん嘩かのの對あひて面めんがが欲ほううとと漸かろく  
ののりりてて二に人にん一いつ時ときふふ出で来きととそそのの支と小こ流りゅうをを貸かせせ湯ゆの  
中なをを探さがしして見みととううららうう二に三さん人にんいいああららうう。ササクク皆みな覺かく悟ご一  
ろ今いまのの二に人にん逃にげるるなな。おおググ一いつてていい番ばん頭あたま對あひて面めんどどここししけけ通とほ見みああと  
どどうどうささるるウウトト思おもふふああががううててひひああららうう。アア痛いたくくららいい。  
出いぬぬけけおお。いいななぐぐららいいととをを一いつたたかかららおおろろ。輕かろ石いしでもでもどどろろ  
でもでも。んんなな對あひて面めんどどここししけけ通とほああんんどどけけららおおらら  
人ひとがが四よ文ぶん一いつ合あ湯たう豆まめ腐ふ二に盃さきががせせたたのの山やまででいいにに濁にご酒しゆのの箱はこ  
食くめめ。ととんんどど奴やつややアア。終おくくららいい誰たれどどここああららううててああららううをを  
つつままややアアががるる。二に日にちのの初はつ湯たう々々大おほ町まち日にちのの夜よ半はんままでで是こゝ  
討うちちめめららせせアア云いふふとと支と小こ流りゅうのの終おくく東あづま子こどどナナアア。おおららうう云いふふちちややああちち  
わわくくれれんんどどけけれれどどハハママままああ能よるる。イイニニアアカカああめめくくままででががああらら  
かかどどめめるるアア。終おくくららいい方かたハハ大おほ体たいなるるアア。アアキキウウククンンチチウウねね



下卷四葉  
北川美丸画



百

集

落



てあつらうかんかんしてかんませへ高がはま解ごうう。どくもま

うこが移入トあまめてうーとてうの生解あううてううて

粗食くナちんぶげとつとつんがくめ「あぐれん人

「あれあれがくねんるう。うううアがく大根ごくちら

醉マア志移くをちんのるう。イママまごちんのるうごえち

のるうマあさん大風のるう。マ大丈夫さんけろん

義遊さんモウか上ごうナ。ゆえのるう。情トヤがる

太夫が不を捨てくれ。酒客が紙治の茶屋場を

出して丸で塩町のまて語ア。ちるがう。はくさゆふう

紅梅殿のニッ胴をちり出させて久ーごまの石町をさう

せうけりのであつごう。赤助がゆあへちり音十郎殿

枕音古と先斗町が口はいて大丈夫ごうりう。仮橋を

出〜カマ一本鎗トマナ音十郎とゆうマ音十郎とゆう

浄らりの名入さる古入松主ごうり

かまへの浄瑠璃へちちをまて住人の性根で押てけまされ  
それが徳と見物の情が能て一割役るりのイマ又ゆ  
べも浪花が例の鍋屋で中二階を張るるりの餉りも

潜人トやませんぢんと豊竹麓太夫のるせんぢんと浄瑠璃のこころをひ

潜上をひひひひせんかち浄瑠璃の一大せんぢんと東へ持来もよされ餉せんかち

めいあゆり仰山げんざんるるりの豊竹越前縁の方東丈葎下丈駒太夫の

を西とちりうぬるのうまいあんまの東口とりふりの

まどくあの中なる物トやまの白湯さゆさまひらうどか

例の通と白湯と鼻をひむ音をくりさせあつて床

の内で味をうひむくりとてけりるあの人おのひとの語ると

あの人を床より出して聞人あつて聞せよ自由なる

らぬあんじや立會へまどくたふ稔昔古がかりと残てある

まどく今マそそろのまどくひけそもごごりませぬ

か出なされ弦をへえそるりのけるまどくとお出がる

アあつらも古い下まふけききき声ごりまどくあつらも

床へをのりまどくをうりこ味せんひきふりつをいあそびれさく人よる

くらをいりしゆの中まであつらひの声のひくもあつらあそびまどくと



くるよれどもゆき浄なり 一そのふ大所河多糸りこがまき  
の三のきりとうりちり 一そのふ大所河多糸りこがまき  
そくゆり羽田の弁天へ旦つて大森の橋の降り出さ  
らびれをてこライ金スス〜潮来を聞終りせちんとう  
たり〜金 そんな安いド々移く是でも大体銭をかけた  
習このごア 潮来をさらふとらて毎日六七十ツ銭を  
はく〜ア 何ににふ〜見あ〜をいす湯へ這入〜ア  
翌の杵屋のさらひがあら〜茶屋〜ウ〜今〜湯の中  
でさらりてそれ〜弾合〜ア ため〜移〜ヤらんごう

女湯の方で大きな声を〜とある〜ざ〜新道の  
藝者の内の婆さんごう〜番匠のワ〜で聞〜  
〜ア〜り〜く

米田頭曰

男湯の残闕女湯の光景ありたる  
さるぐあ〜どもあ編の紙數僅る  
は〜〜〜後編〜り〜あり  
おかけまする女湯の志も〜あり〜  
出来の〜来春出板を皆さるが  
ロまの内の早仕舞  
め〜〜〜

浮世風呂五編

來午春  
開板

文化五年戊辰季秋九月脫稿

同 六年己巳孟春正月發兌

文政三年庚辰仲冬十一月再補刻

江戸書舗

丁子屋平兵衛

美濃屋甚三郎

